

## ドミエヴィル氏の「白話語彙における 古音の保存」説について

平 山 久 雄

### 一

フランスの著名な東洋學者 Paul Demiéville<sup>[1]</sup> 氏に “*archaïsmes de prononciation en chinois vulgaire* (中國俗語における發音の古代性)” (*T'oung Pao* XL-1-3, pp. 1-59, 1950) という長篇の論文がある。“シナ學者たちが白話と呼ぶ中國の通俗言語には、多少とも文法的な乃至は文法化された極常用語の中に、その發音が古代性を含むと認定される語が少なからず存在する”との書き出しで、その實例を擧げて解説し、この現象をもたらす原因について考察を加えたもので、數多の關連事項に關して詳細な注を加えながら議論を展開して行くさまは、フランス・シナ學の重厚さを感じしめるに足る力作である。ここでいう古代的 (*archaïque*)・古代性 (*archaïsme*) とは、ある單語の現代語形が、音韻變化規則から導かれる“あるべき”語形から外れて、先秦時代の上古音或いは隋唐時代の中古音における音的特徴を保存していることである。

D. 氏の *archaïsme* 説に對して、私は「中國語における音韻變化規則の例外——それを生みだす諸原因について——」(東方學 85, 1993, 140-127頁) の § 3.3 (131-129頁) で批判的な意見を記したが、この一文ではそれをいま少し詳しく述べてみたい。

### 二

以下、D. 氏の擧げる實例とそれに関する D. 氏の所説を簡単に紹介したい。なお、實例は原則として北京標準語に限る、それは他方言の口語の現状及び歴史について知りうるものが少ないためである、と D. 氏は述べている (1-2頁)。語形の表記は D. 氏の標記を原則的に襲用する。\*\* は上古推定音、\* は中古音

及びそれ以降の變化段階における推定音である。聲調記號は省略されている。

① 二人稱代名詞「你」*ni* (6-14頁)

現代の口語二人稱代名詞「你」は古代語の「爾」に由來する。「爾」の上古音は *\*\*ńia*、それが中古音では *\*ńie* となり、八世紀には *\*ńziē* となった<sup>(2)</sup>。それは更に *\*zi>\*zi>\*ri>\*ra[>\*r]* と變化して今日の文語代名詞「爾」の語形 *er* に達した。一方口語では、「爾」は上古音的な *\*\*ńia* から *\*niē>\*ndi>\*di* となり、唐代の文獻では「爾」「你」と書かれる。聲母における *\*n->\*nd->\*d-* の變化は唐代に生じた鼻音聲母一般の非鼻音化によるものであるが、やがてこの傾向の衰退と共に *\*d-* は再び *\*n-* にもどり、これに伴い *\*di* は *\*ni* となった。かくて「爾」の聲母 *\*\*ń-* は口語形「你」においては *n-* として保存された。

② 三人稱代名詞「他」*tha* (14-15頁)

現代の口語三人稱代名詞「他」は古代語の「他」（「它」）に由來する。「他」の中古音は *\*tha*。今日「他」は本來の意味“ほか（の）”においては音韻變化の規則に従い *tho* であるが、代名詞としては *tha* と發音され、中古音の母音音價 *\*a* が保存されている。

二人稱代名詞「你」・三人稱代名詞「他」が古音保存の明白な例であるのに對し一人稱代名詞の場合はその點おぼめかしいと述べた箇所への注記（5頁注1）では、次のように述べられている。一人稱代名詞「我」の中古音は *\*ńa*<sup>(3)</sup> で、その現代文語音 *ə* はそれに正しく對應するが、口語音 *uo* は音韻對應規則の例外である。これは中古音から現代に至る *\*ńa>\*ńo>\*ńə>ɣə>ə* という變化経路中の *o* を保存したものかも知れない。

③ 遠稱指示詞「那」*na* (去聲) (15頁)

この中古音 *\*na* に正しく對應する現代語形は *no* である筈で、現實の *na* は中古音の母音 *\*a* を保存したものである。

④ 選擇疑問詞「那」<sup>(4)</sup>(上聲) *na* (15頁)

これも指示詞の場合と同様である。

⑤ 否定詞「沒」「沒有」*mei, mei-iou* (15-21頁)

現代北京語の否定詞「沒」或いは「沒有」は、用法上、確定 (*déterminé*) の否定、及び存在の否定 (*privatif*) に分けられる。確定の否定即ち“…しなかつ

た” “…していない” の場合は「未」に相當する。「未」の文語音 *uei* は音韻變化規則に従い *\*\*miwəd > \*ñwei > uei* と變化したものであるが、口語においては *\*m-* が保存されて *mei* となり、「沒」の字を充てられた。「有」が付いた *mei-iou* の形は、存在否定の場合への類推かも知れないが即斷できない。いずれにせよ、語頭の *m-* が古音保存であることに問題はない。

存在の否定即ち “…がない” の場合は「無」に相當する。「無」の文語音 *u* は、音韻變化の規則に従い *\*\*mīwo > \*miu > u* と變化した結果であるが、口語においては、恐らく、*\*mi(o)u* の二重母音を保存するため *m-* と *-i(o)u* の間には母音 *ei* が挿入されて *mei-iou* となったものであろう。結果的には *\*m-* もまた保存されたのである。

#### ⑥ 疑問助詞「嗎」*ma* (21-22頁)

これについては上記否定詞を論じた一節の末尾に述べられている。文末に置かれて疑問を表わす助詞「嗎」は、唐代に見られる「麼」に由來する。「麼」*\*mua* は、聲母 *\*m-* をもつ「無」「未」などいずれか一つの否定詞と、語氣助詞「啊」とがつづまったものであるが、*\*mua* は音韻變化規則に従えば現代で *mo* となるとところ例外的に母音 *\*a* が保存され、それを表わすため「嗎」という字が作られた。然らばここには聲母・韻母両面での古音保存が見られるのである。

#### ⑦ 助詞「呢」*ni* (22-24頁)

文末に置かれる強調の助詞「呢」は文語の助詞「爾」(「耳」)*\*\*ñia* に由來するが、二人稱代名詞「爾」について述べたのと同じく、それが口語で *ni* となったのは古音保存によるものである。

#### ⑧ 限定助詞 (déterminatif) 「的」*ti* (24-33頁)

現代の助詞として様々な用法をもつ「的」*ti* は、白話文獻では時代により「地」「底」「的」などの表記をもつが、これらは古代の限定詞「之」*\*\*i* に由來するであろう。「之」は文語としては音韻變化の規則に従い *\*tši* を経て今日の *tši* に至ったが、口語では古音に近い *ti* の姿を保つ。この説明に對しては、後世「地」「的」などには「之」になかった副詞語尾的用法、また代名詞的用法 (…するもの) などの見られることが、有力な反證とされるかも知れないが、これらは限定詞の範囲で用法が擴大したものと見なされる。現在の研究段階で

は、*ti* は「之」\*\**li* に由来すると見る以外ほとんど説明の仕様はない。これは“音聲の化石”とも言える程に忠實な古音保存の例である。

⑨ 數詞「廿」*nien* (33-39頁)

「廿」\**ńziap* は「二十」\**ńzi-ziap* の縮約であり、その現代音は *ru* となる筈であるが、實際の口語音は *nien* で、文語音としても今では *nien* が教えられている。この形が \**niem* を経過することは、宋代の資料に「念」と書かれていることから知られる。韻尾 \**-p* が \**-m* に置き換った以外に、「你」「呢」におけると同様、聲母が \**ńz-* から *n-* に變じて古音を保存している。

⑩ 授與動詞「給」*kei*

現代標準語には「與える」を意味する動詞、並びにそこから派生した前置詞「給」*kei* がある。「給」の中古音は \**kīap* であるから、それに正しく對應する現代語形は *tí* の筈であり、現にそれは「給」の文語音として存在する。これは比較的近代までの \**ki* が、*i* の作用による *k-* の口蓋化を経て *tí* となったものである。これに對して白話音 *kei* は、聲母 *k-* を口蓋化から守って保存するため、*i* の前に寄生母音 *e* を挿入したものである。今世紀初頭の南京方言<sup>(5)</sup> は、讀書音・教養ある人々の發音・民衆の發音の三種の發音があったが、「給」について讀書音是北京と同じく *tí*、後二者はいずれも *ki* である。民衆の發音體系では *i* の前で *k-* の口蓋化が一般に生じていないので、「給」*ki* は規則的な語形であるが、教養ある人々の發音體系ではその口蓋化が生じているので、「給」*ki* は例外的語形である。即ち南京では、民衆の發音における「給」の規則的語形が教養ある人々に借用されて、古音保存となっているので、北京のように寄生母音の挿入を必要としなかったのである。

三

以上に紹介した“古音保存”を D. 氏は論文の第 1 頁では *ce curieux phénomène*（この不可思議なる現象）と表現しているが、さすがフランスは理性の國で、D. 氏はそれをそのまま神秘化することなく、この現象の由って來たる原因を合理的に説明しようと努めている（38頁以下）。D. 氏はまず、これが音韻變化規則の單純な例外である可能性を考え、Hugo Schuchardt<sup>(6)</sup>に従って、音韻變化規則に例外を生む三つの原因——即ち(1)他の音韻變化規則との交差、(2)

方言の混交、(3)觀念連合の干渉——を擧げる。そして問題の“古音保存”が(1)(2)には該當しないと述べた上で、(3)に關して、やはり Schuchardt に従い、いわゆる類推現象の他に、使用頻度の高い語における語形の摩滅・崩壊——フランス語で *Monsieur* が *Msiö* となる如き——もまた(3)に含まれるものと認める。D. 氏は言う、高頻度の文法的な單語が、意味の弱化と平行する發音の弱化により語形に崩れを生ずる現象は中國語にもあり、完了助詞「了」が本來の *liau* から *lo*, *la*, *læ* に變化し、限定助詞「的」が *ti* から現在では *dæ* に變化している等はまさにその例である。しかし問題の“古音保存”はこれには該當しない、何故ならば、例えば例①における *ni* は *ær* に比べて、②における *tha* は *tho* に比べて、何ら發音勞力の節減にはならず、更に“古音保存”が保守作用 *conservation* であるのに對し、語形崩壊は Schuchardt の言う如く浸蝕作用 *innovation*, 即ち將來起りうる音韻變化を先取りする形で生ずるからである。

ここで D. 氏は、西歐語において動詞・名詞・形容詞などの強變化即ち不規則形態變化は古い變化形式が使用頻度の高い語に保存された結果であることに注目する。中國語の“古音保存”が文法的即ち用具的性格をもつ語についての保守的現象であるのは、西歐語の不規則變化(變化語尾はやはり一種の用具と見なしうる)と共通する面である。また西歐語にあっても保守現象は必ずしも語尾變化に限らず、常用語の本體にもそれが見られる。フランス語で“*parler bas*”(小聲で話す)など、形容詞をそのまま副詞として用いるのは、ラテン語形容詞中性形の用法を受け繼ぐものであるが、それは常用の形容詞に限られる。またフランスのガバルニー地方ではラテン語 *sc-* の前に寄生母音を生ぜず、標準フランス語の *echelle* (はしご, <*scala*) は *skalo* と發音されるが、これは低俗な事物を表わす語に限られ、*ecrire* (書く, <*scribere*) など高級な語は *eskribæ* のように寄生母音を伴う。

D. 氏はこれらの事例を擧げた上で、これらの保守現象をもたらす原因として、用具的な語(中國風に言えば“虛詞”となろう)はほとんど無意識に發話されるために、話し手自身の規範、或いは他者の規範——標準語や文語など——に合わせて發音上の改變を蒙ることが少ない、という Terracher<sup>7)</sup>の説を紹介する。D. 氏は、このような心理的な方向にこそ中國白話における“古音保存”

の原因を求めるべきだと言う。中國語において個々の語の音形は、それを表わす字に關して傳統的韻書や韻圖が示す抽象的音韻範疇(例えば三十六字母の如き)を、現代の發音に合わせ現實化したもの——あたかもラテン語の *decem* (數詞 10) をイタリー人は音韻對應規則に合せて *detšem* と讀む如く——であるが、常用語彙とりわけ虚詞的性格の強い語を發話する際には傳統的音韻範疇への注意が働かないために、それらは一般の音韻變化に遅れた姿を呈し易い、それはあたかも、西歐語において、一般の語は話し手が意識して用いる故に語形變化の規範に合わせて變化形式が規則化され易いのに対して、使用頻度のとくに高い語はほとんど無意識に用いられる故に規則化を免れて強變化を保持するのと同然である、と述べている。

#### 四

D. 氏は“古音保存”の原因を話し手の心理に求めているが、もし果たしてそうならば、より多くの日常的常用語彙について同様の“古音保存”が觀察される筈ではないだろうか。D. 氏はかつて *\*-k* にわたった入聲字「伯」「百」「宅」「黑」「賊」「得」「落」「學」「脚」「藥」などの北京方言における文・白異讀に言及し、これらの白話音は文語音よりも中古音に近いと述べている(50-52 頁)。例えば「伯」*\*pak > pai* (白), *po* (文), 「藥」*\*iak > iau* (白), *iüe* (文)。D. 氏は、これらは文法的な語ではないが、教養程度に關わらず誰でもが用いる日常語であることに注意している。とすれば、*\*-k* 入聲語に限らず同様の日常普通語彙においても“古音保存”が更に廣く見られて然るべきではないか。例えば「爾」と同じく止攝日母 *\*nízi* に屬し、一貫して口語の世界に生きつづけて來た「兒」「耳」「二」など、その北京白話音は當然「你」と同じく *ni* であることが期待されよう。然るにこれらの語形は文・白の區別なく *er* であり、音韻變化規則に合致している。このような單語までもそれを用いる際に韻書・韻圖の示す規範が意識されたと見るのは無理であろう。

“古音保存”の原因は實は單純なことに在ると私は思う。即ち、使用頻度の著しく高い語はしばしば弱く或いは粗雑に發音されるために、往々その語形に崩れが生じて、音韻變化を生む條件となる音的要素が脱落ないし弱化し、その結果として古音が變化せず保存された外觀を呈する。“古音保存”例の多く

はこのように説明できる。これを私は“輕讀”による語形變化と呼んでいる。上述のように D. 氏も一旦は發音弱化による語形單純化にふれているが、“古音保存”は必ずしも發音弱化には當らず、かつ發音弱化による語形變化が innovation であるに對して“古音保存”は conservation であると述べて、それが“古音保存”の原因であることを否定している。しかしこの論は首肯できない。D. 氏は例①②の *ni* と *or, tha* と *tho* とを比べ、前者は後者よりも發音努力が小さくはないと言うが、それは後世の語形を比較してのことであり、變化の生じた時點に立つて考えるならば、“輕讀”による變化として十分に理解できる。以下、第二節で紹介した“古音保存”例の若干に即して、この點を説明しよう。なお、音聲の表記でイタリックを用いるのは D. 氏によるもの、イタリックを用いないのは然らざるもの、即ち私の推定音價、あるいは漢語拼音方案による表記などである。

①「你」:「爾」\**ńzi* (或いはそれに先立つ段階として \**ni*) の強口蓋化子音 \**ńz-* (或いは \**ń-*) を調音するための前舌面の廣汎な隆起が怠られた結果生じたのが \**ni*「你」であると理解できる。中古音の段階で見れば、\**ńzi* に比べて \**ni* では發音努力が輕減されている。その後 \**ńzi* の上に起った一連の音韻變化により、兩者の間には大きな隔たりが生まれたのである。なお私は「你」の來源は「爾」ではなく「汝」\**ńia* である可能性が高いと考えている<sup>(8)</sup>が、その場合も「你」への變化を“輕讀”によって説明できることに變りはない。

②「他」:「他」が本來的な“ほかの”を意味する場合に *tho* であるのは、「他」の屬する歌韻舌齒音が現代北京で -*o* (-*uo*) であるという音韻變化規則に合致する。舌齒音即ち *t-* や *ts-* などから歌韻の -*a*[-*a*] にわたる際、舌面は口腔の前上方に吊り上げられた状態から後下方に引き下げられた状態へと長い距離を移動し、その中間に [u] に似たわたり音を生じて、韻母全體は [ʷa] に近く發音され、これを媒介として開口韻母 \**-a* が合口韻母 \**-ua* に合流したと考えられる。この \**-ua* に由來するのが現代の -*o*(-*uo*) なのである<sup>(9)</sup>。

一方、三人稱代名詞としての「他」においては、“輕讀”の結果この種のわたり音が生ぜず、かつ聲母の影響で母音がやや狭く前寄りに [a] と發音され、かくて生じた \*[t'a] が話し手の頭腦の中で本來の \*t'a ではなく \*t'a の實現と認識され<sup>(10)</sup>、それがやがて「他」の語形として定着したのであろう。今日の

「他」*tha* (tā) はこの \*t'a から規則的變化と見ることができる。

なお、D. 氏が“古音保存”に当たるか否かに疑いを存した一人稱代名詞「我」についても、その語形が規則的な ə(ě) ではなく例外的な o(wǒ) である理由を、“輕讀”の觀點から説明できる。平山久雄「論“我”字例外音變的原因」(中國語文 1987-6, 409-414頁)を参照いただきたい。現代音によってěとwǒを比べると、後者は却って前者よりも發音勞力が増大した觀を呈するが、變化の生じた時點で見れば後者は“輕讀”の結果と解釋できるのである。

③「那」(指示詞)・④「哪」(疑問詞): これらが音韻變化規則に合致した *no* (nuo) ではなく *na* であることは、“輕讀”の觀點からは説明しがたい。何故ならば、これらは極常用語であるとはいえ、弱く或いは粗雑に發音されることは少なかったと見られるからである。現代語において指示詞・疑問詞は一般に明瞭に強く發音される<sup>11)</sup>。これは發話の焦點のありかと關連する現象で、過去においても基本的には同様であったと思われる。これらに關しては次の第五節で論じたい。

⑤「沒」「沒有」: D. 氏のいう“確定の否定”と“存在の否定”とは、北京では同じ *méi* 或いは *méiyǒu* であるが、『昌黎方言志』(上海教育出版社, 1960年。1984年新1版)によると(新1版 23-25頁)、河北省の昌黎方言では、動詞に關して“確定の否定”を表わす場合には *mei*<sub>去</sub>, *mei*<sub>去</sub> *iou* に、名詞に關して“存在の否定”を表わす場合には *mei*<sub>陽平</sub>, *mei*<sub>陽平</sub> *iou* に發音される。*mei*<sub>去</sub>, *mei*<sub>去</sub> *iou* における *mei*<sub>去</sub> は「未」\**miěi*<sub>去</sub> に、*mei*<sub>陽平</sub>, *mei*<sub>陽平</sub> *iou* における *mei*<sub>陽平</sub> は「無」\**miu*<sub>平</sub> に由來するであろう。北京では音形の類似に引かれて *mèi*<sub>(去聲)</sub> が *méi*<sub>(陽平聲)</sub> に同音化したと見られる。ところで「未」「無」は音韻變化規則によれば、現にそれらの字音がそうであるように、*wèi*, *wú* であるべきところ、それが例外的に鼻音聲母 \**m-* を保っているのは、“輕讀”の結果として介音 *i* が脱落したために、\**m-* が唇齒音 \**ɱ* (>\**v*->*w*-) に變化する“輕唇音化”の條件を缺いた故と説明できる。「無」が *mú* ではなく *méi* であるのは、後接する「有」の含む *i* の同化によるもので、「沒有」は即ち「無有」であり、「沒」は即ち「無有」から「有」が脱落した形式と理解される。

⑥「嗎」, ⑦「呢」, ⑧ *tí*, ⑩「給」: これらもまた、それぞれ D. 氏の語源説を前提した上で“輕讀”による特殊變化として理解できる。紙數の關係で具體



的説明を省略するが、讀者は①②⑤に關する上記の説明から推して、容易にそれを了解されるであろう。ただ「給」については、今日の口語形 *kei*(gěi) の語源は「給」\**kīap* とは別である、即ち *kei* を「給」で書くのが宛て字であろうことは、多くの學者が推定するところである。その語源としては、池田武雄「〈給〉(gei)の發生について」(中國語學 122, 1962-7, 1-5頁)に述べられた、“手渡す”意味の「過」と介詞「與」とがつづまったものとする説が妥當と考える。私はこの説に沿って、「過」\**kuo* (<\**kuo*) + 「與」\**ü* の縮合から生まれた \**kü* が、“輕讀”を経て *gěi*[kǎi] となったと解釋している<sup>13</sup>。

⑨「廿」：これに關しては、「廿一」「廿二」などの複合數詞の中で「廿」\**ńziap* の聲母が“輕讀”の結果 \**ńz-* から \**n-* に弱化し、かつ聲母の鼻音性が韻尾 \**-p* を \**-m* に變えて \**niəm* の語形が生じたのであろう。これが更に“輕讀”を通じ \**niem* と認識され(これには *-m* の影響による母音音色の曖昧化も關わったであろう)、やがてこの語形が單獨の「廿」にも擴がったのが今日の *nien* (niàn) であろう。但し、聲母の變化には“避諱改音”が關わった可能性もある。即ち「廿」\**ńziap* は「入」と同音で、「入」のもつある卑猥な意味への連想を避けるため \**ńziap* > \**niap* への特殊變化が口語の世界で生じたのかも知れない。なお、今日の口語では20は「二十」*èrshí* と言い「廿」*niàn* とは言わない。

## 五

以上に述べた輕讀説もまた D. 氏の心理説と同様一種の假説であり、なお將來の検討を俟つものであるが、少なくとも“古音保存”が極常用語にのみ見られる點を説明するには一層有効であらう。“輕讀”の結果、「了」\**liau* > *lə* のように音聲の弱化や單純化が生じて“侵蝕的變化”となるが、音的要素の脱落により音韻變化を生ずる要件が失われた場合には“古音保存”がそこに見られることになる。“侵蝕”と“保守”の區別は本質的なものではない。D. 氏が北京の \**-k* 入聲字について挙げたような口語音と文語音との對立に關しては、文語音は他方言からの借用であるとして説明できる。口語音が文語音より常に古い特徴を残すと限らないことは D. 氏自身もアモイ方言を例に認めている<sup>13</sup>。ちなみに D. 氏が挙げるフランス・ガバルニー地方におけるラテン語 *sc-* の對應に關しても、寄生母音を伴う *esk-* は中國語の文語音と同種の借用語形と見

ることができる。中國語でも高級な語は文語音系統の一音のみで口語音系統の音をもたないことが多い。今日「學」「まなぶ」において口語音系の xiáo が廢され文語音系の xué に統一されているなどはその例である。

“輕讀”による語形特殊變化の例として前記「論“我”字例外音變的原因」では「我」の他「不（弗）」「所」（409頁）・「們」（（輩）」（411頁）を、「中國語における音韻變化規則の例外」では「了」「不」「箇」（131頁）を挙げた。いずれも變化を生じた時點で使用頻度が極めて高かったと見られるものである。

ここで“輕讀”説からは説明しがたいと先に記した③「那」④「哪」について述べよう。中國科學院語言研究所編輯『方言調查字表（修訂本）』（科學出版社，北京，1964年）の歌韻（1頁）舌音の部分を下に掲げる。

	平	上	去
端	多		
透	拖他		
定	駝駝拿，駝起來	舵	大駝駝子
泥	挪	哪（那）個？	那
來	羅羅羅		

上表に收められた字の韻母は、今日 -uo と -a と二種の對應を示す。-a に屬するのは少數で、「他」（平聲）・「哪」（上聲）・「大」「那」（去聲）のみ、その他はみな -uo である。-a は口語的な語に限られるが、-uo にもまた「多」「挪」をはじめ口語的な語があるので、白話音 -a・文語音 -uo という層位の別と見なすのも難しい。「他」は前記のように“輕讀”による特殊變化と説明できるが、「哪」「那」はむしろ強く發音されることが多かったであろう。「大」もまた、感情をこめて強く發音されることが多かったと思われる。日本語の「オオキイ」に對して「オッキイ」、「デカイ」に對して「デッカイ」という強調形の存在することが思いあわされる。

「哪」「那」「大」の韻母が -a であるのは“輕讀”とは反對の“重讀”の結果と見ることができよう。歌韻 \* $\text{-a}$  が次第に舌位を上げて近世的な \* $\text{-}\text{ɤ}$ （牙喉音）、\* $\text{-u}\text{ɤ}$ （舌齒音>\* $\text{-uo}$ ）に變化したのは發音勞力輕減の欲求によるものであるが、その先驅となる音聲變化として歌韻の舌位上昇傾向が一般に生じた後

も、音節が強く發音された場合には、子音の閉鎖が破裂する勢いに乗って \*-a は單純廣母音の姿を維持したのであろう。また「哪」「那」「大」の聲母 n-, d- は調音位置が口腔前部にあるため、それらにおける \*-a はやや前寄りに發音されたであろう。これらの状況を媒介として「哪」「那」「大」の韻母はやがて麻韻 \*-a と認識されるようになった<sup>14</sup>。今日の nà, dà はこのように生じた \*na<sup>15</sup>, \*da<sup>16</sup> に由來すると理解できる。この場合、“輕讀”と“重讀”と互いに相反する原因が、歌韻 \*-a が舌音聲母の下で -a になるという同一の結果をもたらしたのである。

### 注

- (1) Demiéville 氏 (1894-1979) に関しては、“*Paul Demiéville*” (T'oung Pao, Vol. LXV, 1-3, 1980, pp. 1-12), 榎一雄「一九七八—七九年物故歐洲東洋學者の著作」の「ドミエヴィル」(『榎一雄著作集』11, 東京, 汲古書院, 445-468頁), 興膳宏「ドミエヴィル」(高田時雄編著『東洋學の系譜 [歐米篇]』東京, 大修館書店, 1996年, 211-221頁) 参照。
- (2) *ń, ź* は各々つよく口蓋化された舌面的な *n, ɲ* を表わしている。
- (3) *ñ* は軟口蓋鼻音 *ŋ* を表わしている。
- (4) 選擇疑問詞「那」は現代では「哪」と書かれる。
- (5) Hemeling “*The Nanking Kuan Hua*” (Leipzig, 1907) による。
- (6) H. Schuchardt “*Über die Lautgesetze, gegen die Junggrammatiker*” (Berlin, 1885; *Hugo-Schuchardt-Brevier*, Halle, 1922 所収) p. 45.
- (7) A. Terracher “*Les aires morphologiques dans les parlers populaires du Nord-Est de l'Angoumois*” (Paris, 1914) p. 54.
- (8) 平山久雄「中古漢語魚韵的音值——兼論人稱代詞“你”的來源」(中國語文 1995-5, 336-344頁) 340-342参照。
- (9) 有坂秀世『音韻論』(東京, 三省堂, 1940) 231頁所載の, ラテン語 *bonum, Petrum* の *buono, Pietro* への變化過程を参照。*[bo:no]>[boono], [pe:tro]>[peetro]* の如く, 發音努力輕減のための, 開母音の二重母音化が想定されている。中古漢語の歌韻の場合には, 二重母音化が子音調音位置からの動程が長い舌齒音の場合にのみ生じ, その動程が短い牙喉音の場合には二重母音化が生ぜず, -a はそのまま狭まって現代の -e[-ɨ] となった。なお, この二重母音化が主母音 *a* を含む開口韻母の中で歌韻においてのみ見られ, 例えば寒韻 -an で見られないのは, 歌韻は韻尾がゼロであるためである。即ち(中國語は韻尾の有無に拘わらず韻母の長さは基本的に同じなので)歌韻の *a* は長く發音され, そのため二重母音化に十分な時間的餘裕があったのである。

- (10) 中古漢語では主母音に  $\alpha$  と  $a$  との對立があった。代名詞「他」が  $t'u$  から  $t'a$  に移ったのは、韻名で言えば歌韻から麻韻二等開口に移ったことになる。二等韻母は舌頭音  $t-$  の系列とは結合しないのが原則であるが、少數の例外があり、今日の「打」 $d\check{a}$  も中古漢語の段階では  $ta:l$  であつたと推定される(韻書では「打」の音として  $taŋ:l$  のみを載せる)。
- (11) 現代標準語において疑問詞及び指示詞は、文中のどの位置にあらうとも“文アクセント”(意群重音)の位置を自身の上に引きつけて強く發音されるのが原則である。徐世榮「意群重音和語法的關係」(徐世榮『語文淺論集稿』安徽教育出版社, 1984年, 155-163所收), 陳文芷「談重讀」(中國語學 228, 1981年, 126-133頁) 参照。
- (12) 「去」 $*k'i\alpha\rightarrow*k'ü$  と「給」の白話音とが現代方言で同一或いは類似の語形を示すことが注意される。即ち揚州「去」 $k'i\alpha$ , 「給」 $k\alpha i:l$ ; 長沙「去」 $k'y\alpha$ , 「給」 $k\alpha i:l$  (『漢語方音字匯』第二版, 北京, 文字改革出版社)。南京方言も, 趙元任『南京音系』(科學 13-8, 1928)によると「去」 $k'i\alpha$ , 「給」 $ki:l$ で, D. 氏が Hemeling によって引用する教養ある人々の狀態に一致する。ちなみに「給」のこの形を D. 氏は民衆的發音からの借用と解釋するが, 南京知識層の言語内部での“輕讀”による特殊變化でもありうると私は見る。もし借用であれば, 「去」「給」に限らず, いま少し多くの常用語に同様の借用語形が見られる筈である。
- (13) その例として入聲韻尾  $-p$ ,  $-t$ ,  $-k$  がアモイ文語音では保たれ白話音では聲門閉鎖音に變化していることが挙げられている(50頁)。
- (14) 英語では1600年頃から現代への間に,  $beat$ ,  $seat$ ,  $heat$  などの母音は  $[e:]>[i:]$  と變化し, 一方  $gate$ ,  $hate$ ,  $date$  などの母音は  $[e:]>[e:]>[ei]$  と變化したが,  $great$  は前者の群から例外的に後者の群に移った。この理由につき有坂秀世『音韻論』(三省堂, 東京, 1940年) 265頁は“この語は常に特別の感動を以て重々しく發音される傾向があるので, その關係から獨特な形を發生せしめるに至ったのではなからうか”と述べている。「大」が強調による特殊變化を遂げたと思われるのと, あたかも類似した例である。